

※ 紹介※

山岡栄市著「漁村社会学の研究」一九六五年

本書は、著者がこれまで行つてきた漁村社会の研究を体系的に整理するとともに、こんどのさらなる研究への基礎を構築したものである。内容は漁村社会研究の学論を扱つた序論、漁村における家族その他の諸集団と、意識や規範とを扱つた漁村社会構造論、一方における漁業の資本主義による変化と他方ににおける漁村の後進性とを扱つた漁村社会変動論、さらに漁村における共同体論、経済史的変遷、離島村落（隱岐島）などを扱つたモノグラフを中心とする雜篇からなつていて。

著者は農村について農村社会学が成立しているのと同様に、漁村についての「漁村社会学」の成立が可能であるとし、これを一、漁村を農村との連続面において把握すること、二、漁村を都市的市場圏との関連において把握すること、三、漁村をとくに其同体として把握すること、の三つの視点に求める。

内容は広汎であり、紹介すら充分に行うことは難しいが、隨所に著者の体系的な漁村社会学を樹立しようという姿勢と意欲が伺われる力作である。とくに著者のくわしい山陰を中心とする裏日本（内日本）の漁村が実証的基礎をしており、そこから著者の漁港漁村・砂浜漁村・廻船漁村の三類型が構想されている。

ここで感想をのべさせて頂くならば、右の三視点のうち「三」がかなりつよく感じられた。

「一」はむしろ農業とのこれ（家族労働力の配分・耕地山林の総有の問題として）と思われる。また「二」は労働力・資本・水産物の各市場圏としてとらえられるが、このことは漁場が他面その拡大によつては漁村共同体を解体する作用をももつていてことと関連して、漁業都市の社会学を発展させる可能性が考えられる。ともあれ、山形・新潟以外は主として東日本の太平洋岸の漁村しかしらない（評者にてつてはきわめて教えられるところが多かつた）。

（田野崎 昭夫 記）